

## 潜伏キリシタン墓の数理分析の視界

— 旧木の口墓所採取遺物組成の分析 —<sup>\*</sup>

加藤久雄<sup>\*\*</sup>、野村俊之<sup>\*\*\*</sup>

The field of view of the mathematical analysis of hidden Christian tomb

Hisao KATO<sup>\*\*</sup>, Toshiyuki NOMURA<sup>\*\*\*</sup>

**キーワード：**潜伏キリシタン、遺物組成、陶磁器、墓前祭祀

### はじめに

旧木の口墓地は五島市福江島平蔵町木の口地区に所在する集落墓地である。集落では墓地としての伝承は残っていたものの、近年まで藪に覆われており、以前は改葬が度々行われたものの、それを除けば比較的人の手が入っていない、言い換えれば、それは保存状態が良好な墓地と言える。現在もカクレキリシタンに関わる習俗・伝承を継承する管理者が伝えるところによれば、明治以前からの木の口集落の墓地であり、復活期以降はカクレキリシタン、カトリックの他、神道葬や仏式の葬儀・祭祀もおこなわれたようである。十字架の浮彫がある（伏碑様板石）墓石1基と改葬墓石2基を除けば墓石を持たない石組み墓のみで構成され、外見からこれらを区別することが難しい。

平成2013年度から開始した旧木の口墓所の総合調査は、平成2014年に概要報告<sup>1)</sup>と造墓原理<sup>2)</sup>、2015年に写真記録<sup>3)</sup>と予察<sup>4)</sup>、2016年に遺物の概要報告<sup>5)</sup>と他墓所との比較<sup>6)</sup>を長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要に年度ごとに研究成果として発表してきたほか、同年それまでの取りまとめとして九州考古学会<sup>7)</sup>にて概要報告をおこなった。

墓所の形成過程と継続・終了時期については、予察の中で採取遺物の整理途上ではあったが各墓の平面形態と法量及び墓所区画から概略の考察をおこなったが、この時点では遺構と遺物の関係を十分に考察しえなかった。

一方遺物については、概要報告で美濃口雅朗氏の協力を得て第1次調査の採取遺物の一覧表を掲載し、遺物編で井澤洋一氏の協力の下、主たる遺物の実測図と詳細及び第2次調査で採取した遺物

の一覧を掲載した。

本稿では、これらの調査結果の統合をはかり、出土遺物の器種構成と年代、出土地点との関係を探るために統計処理をおこない、さらに墓所の実態を明らかにする試みをおこなった。

### 1. 調査の対象と方法

第1次・2次調査に際して、墓地管理者の清掃に伴って採取した遺物の散布している点について平板測量により記録をおこなった。これらについて、器種・時期・採取区画ごとに破片数をカウントし、それぞれの要素についてクロス集計をおこなった。遺物組成の比較に関しては、カイ二乗検定( $\chi^2$ 検定)を一部に施した。適用基準として、期待値が5未満のセルが、全体の20%以上になってはならない、とされており、少ないサンプルに関しては、検定を施さず、傾向を考慮する程度で扱うことにした。

器種分類については美濃口氏の所見により、細分化をおこなったが、全く器種が不明なものを除き、中心組成をなす碗については細分化不能なものを単に「碗」とし、それ以外については「供膳具」とした。

また時期については、同じく美濃口氏の観察により、5時期に大別した。1期は18世紀から19世紀半ばまでのいわゆる禁教期のもの、2期は19世紀半ばから20世紀初頭の復活期のもの、3期は明治時代後半から昭和初期のもの、4期は明治時代末から昭和半ばの戦前期のもの、5期は戦後から現在までのものである。

採取区画は、図2のように当該墓所が概ね3段構成で造成されており、各区の平坦面から土端の下端までを1単位として上から上段(1段)・中段(2段)・下段(3段)、中段(2段)の内、遺構番号No.46~48付近の墓石のある改葬痕跡のある

<sup>\*</sup> Received January 6, 2017

<sup>\*\*</sup> 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

<sup>\*\*\*</sup> 長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所客員研究員、石造遺産調査会

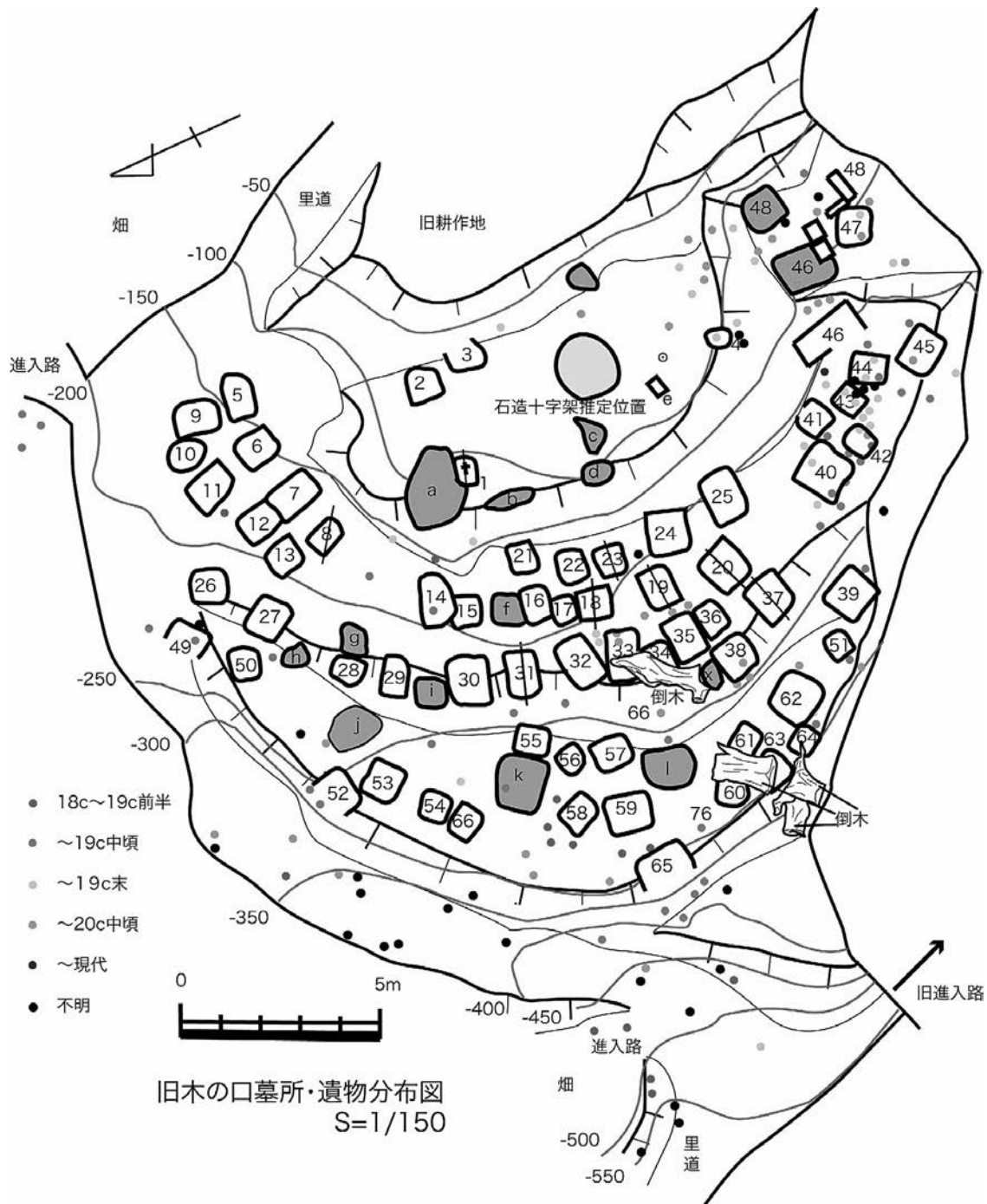


図1 旧木の口墓所・遺構・遺物分布図

東側の区画を中段'（2段'）と表記した。この細分の理由として、管理者による比較的近年まで墓前祭祀が行われたという証言に依拠した。またそれ以外の地点で採取した遺物は、墓所が里道で囲

まれていることから単に「道」と表記したが、この一部には道の法面や道に隣接する耕作地から採取した遺物も一部含まれる。

## 2. 各時期ごとの散布状況

表1 遺物破片数の区画と時期との対応

	1 期	2 期	3 期	4 期	5 期	計
上段	6	9	1	3	0	19
中段	20	12	5	3	1	41
中段'	1	2	1	1	2	7
下段	11	7	1	1	0	20
道	19	1	0	0	0	20
計	57	31	8	8	3	107

1 期と 2 期の空間分布比率の差の検定結果

独立性の検定			
カイ二乗値	自由度	P 値	* : P<0.05 ** : P<0.01
13.5207	4	0.0090	**

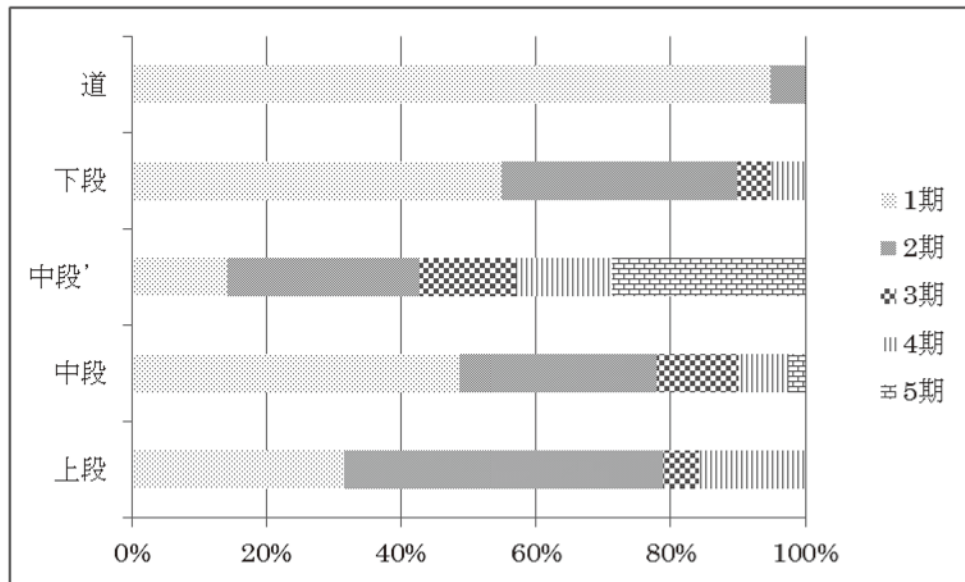


図2 遺物破片数の区画と時期との対応グラフ

採取遺物は圧倒的に1期のものに集中し、特に「道」においてその傾向は顕著である。このことは、18世紀末から遅くとも19世紀初頭には陶磁器を使用した墓前祭祀が始まったことを示唆するが、この時期に造墓の最盛期を迎えたとは言いきれない。なぜならば破損による遺物の細片化が進み、その結果単純に破片数がそれ自体が多量になった事が考えうるからである。同時に「道」に多量の破片が分布していることは古い遺物ほど破損し拡散したことを示すからである。

しかし一方で、1期の遺物の中には完形に近いものが数点見受けられ、当該期に供献が開始されたことそれ自体は間違いなからう。但し、それには遺物の生産時期と消費（供献）時期の時間差を

勘案する必要がある。それでもなお当該期に供献が開始されたことは、遺物を仔細に見渡した時に18世紀代のものも含んでいるからであり、陶磁器のライフサイクルを考えても、主として日用雑器を数代に渡って使用することは一部例外を除き考えにくいからである。

「道」に散布する1期遺物が多数を占めることから想定しうるのは、各区画の分布において1期の遺物は多分に移動拡散の結果としての混入が考えられる。この点には注意を要する。

以上を勘案した上で、各区画の大まかな年代観を示してみたい。まず上段であるが、3割程度の1期遺物を含むがもっとも割合が高いものは2期であり、また復活期のものと考えられる十字架が

浮彫の（伏碑様板石）墓石があること、改葬に伴うものと思われる礫の集積が見られることから、主たる供献時期は復活期にあることが見て取れる。また4期すなわち明治末から戦前にかけても供献は継続しており、当該期に新たな埋葬もあった可能性が考えられる。

中段は1期が最も多く、ついで2期の遺物が見られる。一方3期の遺物も他区画と比べてまとまって出ており、禁教期から比較的多年に渡って供献が継続した区画と思われる。遺物が供献されるまでの期間を勘案すれば、復活期以降に造墓された例も少なからずあろう。全期間を通して中心的な墓域であったと考える。

中段’では唯一5期の遺物が採取されている。紀年銘のある墓石2基から明治後期に新たな造墓がなされ、供献がその後も継続したことは、管理

者の証言とも一致する。

下段では1期の遺物が半数を超え、継続して2期の遺物も少なからず採取されている。一方で3期以降の遺物は1割程度しか採取されておらず、この時期にはほとんど新たな供献がなされていないことが理解できる。これは、明治後半以降に新たな造墓がなされなかったことや、この時期にはもはや被葬者がどの係累であるかよくわからなくなっていたことが推察し得る。

以上のように、各区画の遺物組成の時期傾向から、各区画が家系を造墓単位の基本とするというよりも、おおむね時期差を表しているものと見るべきと考える。しかしながら、中段・下段では重なる時期の遺物も多く、家系による区画規制があった可能性は弱いながら残る。

### 3. 各時期ごとの器種構成

表2 遺物破片数の器種と時期との対応

	1期	2期	3期	4期	5期	計
碗合計	59	19	1	7	0	86
碗蓋	2	0	0	0	0	2
小杯	2	4	3	1	0	10
皿	2	1	0	0	0	3
コップ	0	0	0	0	3	3
急須	0	1	0	0	0	1
瓶類	0	2	0	0	1	3
供膳具	9	0	2	0	1	12
計	74	27	6	8	5	120

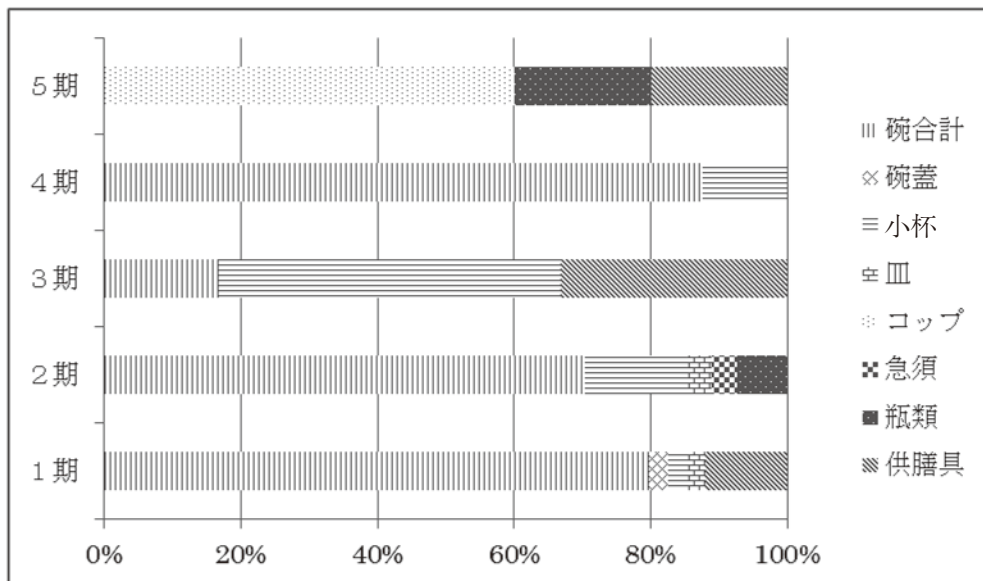


図3 遺物破片数の器種と時期との対応



時期別の器種構成は図3のように、1・2期にあっては、碗類が著しく多いが、3期においてのみ、一時これが小杯に取って代わられる。また5期の近現代にあっては碗類は消滅し、コップ形磁器が主体となる。

碗類の用途については後段で考察するが、小杯・湯呑・コップについては供献物が液体であったことは間違いないと考える。

それ以外の傾向に着目すると、1期と2期のみ皿破片が採取されており、この時期に液体以外のものが供献されていた可能性が高い。香炉や灯明皿の転用も考えにくく、他に土師質の皿や瓦器質の遺物も採取できなかった。今回は取り上げていないが、大ぶりの牡蠣殻1点が採取されており、これも供献容器としての用途を考えるべきかもしれない。

表3 遺物破片数の碗の種別と時期との対応

	1期	2期	3期	4期	計
広東碗	1	0	0	0	1
小丸碗	2	0	0	0	2
小広東碗	3	0	0	0	3
小碗	2	1	0	0	3
端反小碗	1	0	0	0	1
端反碗	18	10	0	0	28
平形碗	0	1	0	2	3
湯呑碗	0	1	0	4	5
碗	32	6	1	1	40
計	59	19	1	7	86

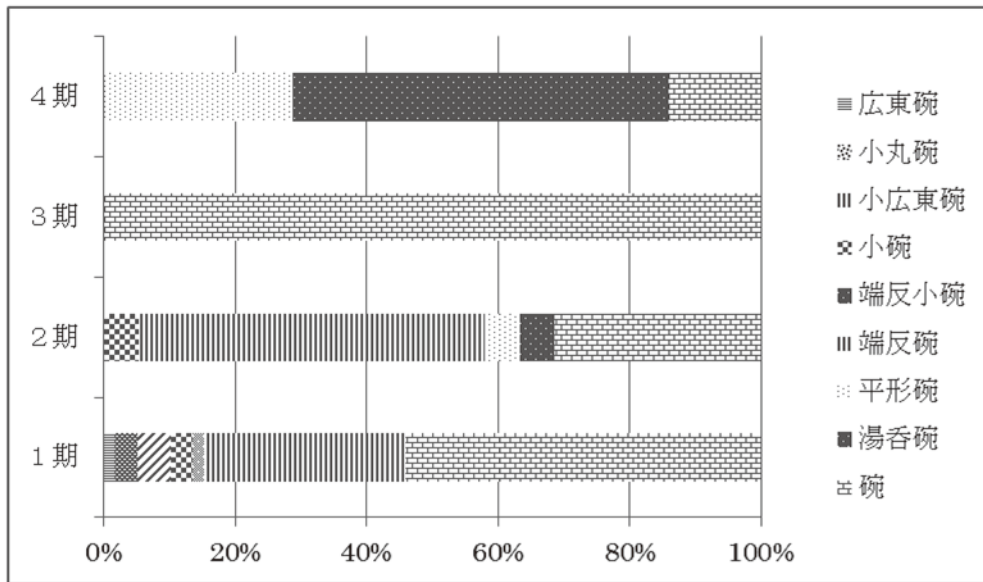


図4 遺物破片数の碗の種別と時期との対応

碗類の詳細種別は図4のように1期（禁教期）においては、様々なバリエーションを示し、近世後期における生産地での器種多様化が反映される。また、湯呑碗、平形碗は近代以降に初出し、特に湯呑碗にあっては、5期に初出するコップ形磁器とともに内容物が液体に限られるという属性

を示すものと考えられる。一方で5期では、碗類は消滅することから、一つは液体容器としての碗が他の器種に取って代わられること、もう一つは碗に盛るような内容物の供献が停止されたことが考えられる。

#### 4. 区画ごとの器種構成

表4 遺物破片数の区画と器種との対応

	上段	中段	中段'	下段	道	計
碗	12	43	3	25	15	98
碗蓋	0	1	0	0	0	1
小杯	2	6	0	4	0	12
皿	0	1	0	1	0	2
コップ	0	1	2	0	2	5
急須	0	0	0	2	0	2
瓶類	1	0	1	0	0	2
ガラス瓶	1	0	0	0	0	1
供善具	1	2	1	1	6	11
計	17	54	7	33	23	134

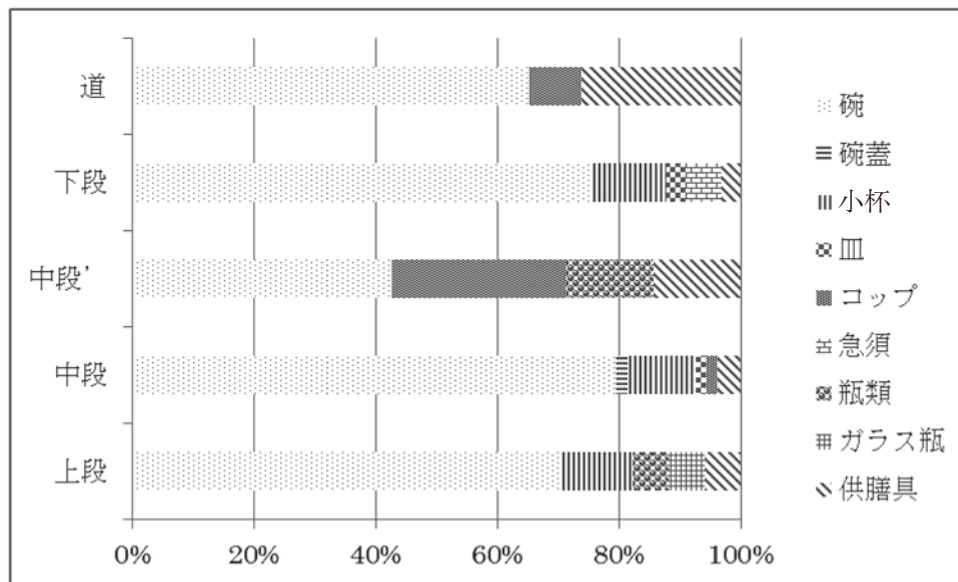


図5 遺物破片数の区画と器種との対応

供膳具は「道」に多く見られるがこれは形態不明の細片であるため、単に「道」に流出した細片が多いことを示すに過ぎない。

ここでは、総破片数が少ない皿・碗蓋・ガラス瓶・瓶類に着目したい。皿は下段と中段でのみ採取された。先述した通り、液体以外の物が1～2期に供献されたことを示すにとどまる。碗蓋は中段でのみ採取されている、蓋物は得てして正式な

膳に供されるものであることから、供献物から見て厚葬傾向があったと思われる。ガラス瓶は上段で1点のみ採取されており、詳細な時期については不明であるが、年代的に新しい要素と考えてもよからう。瓶類は上段（2期）と中段'（5期）にのみ見られ、これを花瓶と考えるならば、比較的新しい時期の供献形態と考えることも可能であろう。

表5 遺物破片数の区画と碗の種別との対応

	上段	中段	中段'	下段	道	計
広東碗	0	1	0	0	0	1
小丸碗	0	0	0	2	0	2
小広東碗	0	0	0	0	2	2
小碗	0	0	1	1	1	3
端反小碗	0	3	0	0	0	3
端反碗	1	13	0	11	2	27
平形碗	1	1	1	0	0	3
湯呑碗	2	2	0	1	0	5
碗	8	23	1	10	10	52
計	12	43	3	25	15	98

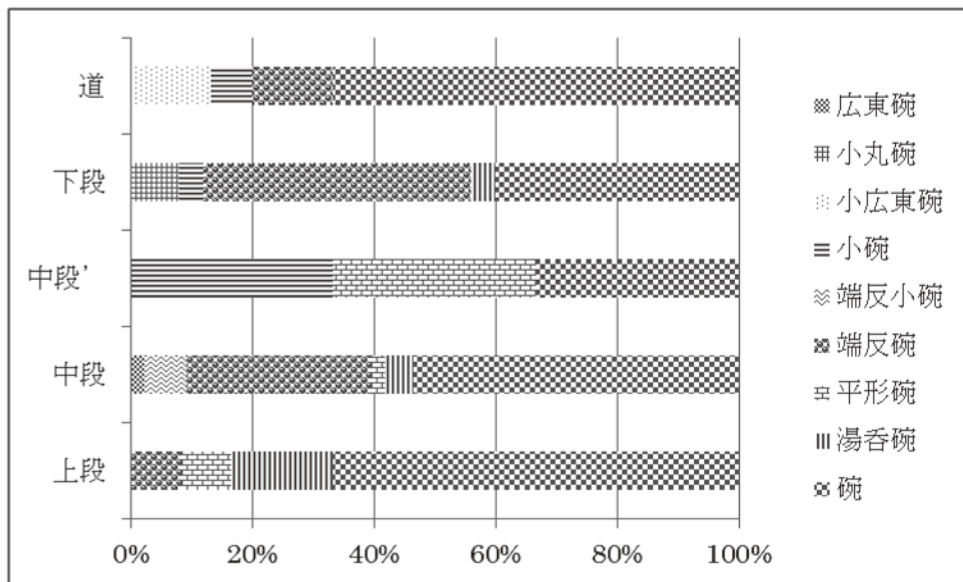


図6 遺物破片数の区画と碗の種別との対応

碗類の詳細を見てみると、「道」と上段で6割を占めており、供膳具と同様細片であるため詳細形態がわからないものが多く、原位置から動いているものの可能性がある。

広東碗は19世紀に肥前地域で広く製作されており、これも中段・下段に当該期において盛んに供献されたものとみられる。対して平形碗は近代以降の流行であり、多く割合を示す中段' と上段が比較的、新しい時期の供献時期を示すと考えて良い。

このように各区画ごとの器種構成は、供献時期を反映するものと考えられる。

## 5. まとめ

以上の結果から、幾つかの点について整理したい。

採取遺物は言うなれば墓前に常備された有機物以外の供献物であり、葬送や折々の節目にあたってのみ供献する陶磁器・金属製品や有機物は残存しないと考えるべきである。但し、例外としては動物遺体であるが、自然遺物と考えられる1点の鳥骨と、供献物の可能性がある牡蠣殻1点のみが採取されたのみである。

### 5.1. 仏具との違いと供献物

仏具でいう三点具足は花瓶・香炉・灯明であるが、瓶類2点を除いて採取されていない。

墓石を伴う一般的な近世墓にあっては花瓶の代わりに基礎部分に2穴を穿つものが見られるものの他、基部を地中に埋め込む陶器製花筒、近年設置されたものとしては竹筒を模した主に緑色のプラスチック製筒型容器が散見される、このことは

近代以前においては竹筒が花瓶に代用された痕跡であると考えられる。また灯明は金銅製の蠟燭立てが供献時期は不明ながら残存していることも多く、石製の燈籠が造立される例もある。香炉にあっては同様に時期不明であるが陶磁器製のものが備えられていることが多い。

大名墓に目を転じてみると、石灯籠、石製花瓶は普遍的に見られ、石製香炉は平戸藩松浦家墓所などごく一部に見られる<sup>8)</sup>。

では、当墓地ではどうであろうか。花瓶については2点のみ瓶類が採取されており花を手向ける習俗があった可能性がある。プラスチック容器の痕跡は見当たらないが、外海地方や生月島では石組み墓にそれらが設置されることは少なくないことから、当墓地で供献が継続された時期には竹筒の花立てがあった可能性を指摘しておきたい。

灯明については、金銅製の蠟燭立てはもちろん磁器製の蠟燭立て、土師質の灯明皿は見られず、供献物としての灯明用品はなかったものと思われる。

香炉も石製のものはもちろん陶磁器製のものは皆無である。このように仏式葬祭における三点具足はなかったものと考えて良い。しかし、これを仏式墓のないことと直接結びつけることは難しい。

また脚付きの仏飯器も採取されておらず、穀類を供えたかどうか不明である。

しかし墓の設えで注目すべき点として水入がある。近世の一般の墓では基礎又は基壇部分に水入を穿つ例が少なくなく、大名墓にあっては石製の角形や蓮弁形の水入が設置されるのである。当墓所では近代後半になると湯呑碗や磁器製コップが供献されるようになる。これらは、水・茶・酒等の内容物を問わない液体のための容器である。これらの先駆的形態として小杯がすでに潜伏期に見られることから、液体の供献は早い時期に始まったものと考えられる。

このように採取遺物から信仰形態を推測することは難しいが、碗類が大勢を占める状況やそれが時代が下るにつれて漸減することは、当墓所の特性として注目して良い。

最も多く採取された碗類の供献された内容物については現状から不明であるとしかいいえないが、仏飯器・香炉がないことから食物の供献、香炉の代用が考えられるとともに、液体容器としての使用も考えられる。

食物の内容についてはどうであろうか。茶碗をご飯茶碗として捉えるのであれば、米などの穀類

を供えた可能性はあろうし、主食であった芋あるいはカンコロや、汁物、海産物や野菜を始めとする故人の好物を供えることもあったのかもしれない。近代に至って碗類が減少するとともに湯呑碗、コップが増加することから液体容器、それも水入であった可能性も高い。また、本墓所の場合、カクレキリシタンにおいて、行事で用いる聖水など、水が特別視されていたことには留意すべきであろう。

## 5.2. 区画ごとの供献時期

中段・下段に古い時期の遺物が多く、上段は比較的新しい様相が見え、中段'は明らかに新しい時期の供献が多いことは各論で述べてきた。

しかしこれらはあくまでも供献時期の問題であり、基本的には最新の遺物が供献の最終時期を示すことに注意しなければならない。同様に最古の遺物が墓所造営の始まりを示すとは限らないことも生産と消費を考えれば明らかである。

そこで、各区画の新しい時期の遺物について注目したい。一般に墓標のない墓においてはこの墓がいつ誰がなくなったために造られたものかは墓籍図等の外部記録がなければ、記憶に頼るほかはなく、記憶は伝承されるものの徐々に薄れていくものである。ましてや、似たような形状の石組墓が密集する当墓所ではなおのことである。したがって、新しい時期の供献物があるものに対して、造営後に時間が経過していないものと仮定して考える。

ここから考えれば、中段'は紀年銘のある墓石が存在するとはいうものの、戦後まで祭祀が継続するつまり、新しい墓域であることが明らかになる。

次に上段であるが、前述の通り十字架浮彫のある（伏碑型の）板石墓があることから復活期にも造営された区画であることがわかる。同時に墓域に対して墓の密度が低く、被葬者が明確であったためであろう改葬痕もあることから新しく造営されたことも理解できる。そこで遺物の時期組成であるが、4期の供献物が中・下段に比して多いことから早くとも、戦前までの時期までの継続がうかがえるであろう。

最後に、中段と下段であるが、中段では3期の遺物が下段に比して多く採取されており、また器種もバラエティに富んでいることから、造営を含み長期間に渡って使用された墓域であることが考えられる。但し、中段と下段の使用開始時期の前



後関係は明確ではない。

## 6. 今後の展望

本稿では遺物の分布と組成を中心に供献のあり方や造営時期について考察した。

旧木の口墓所は潜伏キリシタンの墓を含むことが明確な集落墓地であるとともに、比較的古い時期から人の手が入っていない貴重な墓地であると考えている。

今後は個々の墓と遺物の関係性についてより精緻な検討を行うとともに、未だ十数基におこなっているにすぎない石組墓の悉皆実測を実施し、形態と構造から型式を設定し、さらに遺構・遺物論から詳細な時期設定を試みなければならない。

## 謝辞

本研究は、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所2016B2の補助を得て実施したものである。調査にあたって全面的にご協力いただいた管理者である木口榮様他の地元の皆様、遺物観察をお願いした熊本市熊本城調査研究センターの美濃口雅朗氏、実測を引き受けていただいた井澤洋一氏、その他調査・整理にご協力頂いた本学地域総合研究所客員研究員の白濱聖子氏、別府大学考古学研究室の松園奈穂氏をはじめとする皆様、本学学生諸氏に併せて感謝を表したい。

## 注、参考文献

- 1) 加藤久雄・野村俊之ほか (2014) 『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所調査)』、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12-1、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所
- 2) 野村俊之・加藤久雄ほか (2014) 『潜伏キリシタン墓の配置原理・旧木の口墓所』、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12-1、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所
- 3) 加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介 (2015) 『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所調査その2)』、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要13-1、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所
- 4) 野村俊之・加藤久雄 (2015) 『石組墓の成立と変化についての予察 (福江島木の口墓所の潜伏キリシタン墓をめぐって)』、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要13-1、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所

- 5) 野村俊之、加藤久雄、白濱聖子 (2016) 『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 3 (旧木の口墓所・遺物編)』、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要 14-1、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所
- 6) 加藤久雄、野村俊之 (2016) 『五島列島における潜伏キリシタン墓地に関する分布の基礎的研究』、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要 14-1、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所
- 7) 野村俊之、加藤久雄 (2016) 『旧木の口墓所調査の概要』、九州考古学 91号、九州考古学会
- 8) 美濃口雅朗・野村俊之 (2013) 『第5回近世大名墓研究会発表資料』「九州近世大名墓調査の視点」 大名墓研究会

